

研究班報告 1 Community Studies Working Group

歴史都市ウィーンのデザイン革命

土岐 寛

世界遺産都市ウィーン

昨夏、ウィーンを4年ぶりに訪れた。1996年以来、市区関係を中心に都市内分権を調査してきたが、今回はそれに加えて、景観行政の担当者にヒアリングし、資料を収集した。ウィーンは「ウィーン会議」で有名なシェーンブルン宮殿とその庭園が1996年に世界遺産に登録されている。さらに2001年にかつて城壁で囲まれていた都心部（ウィーン1区）と、城壁の跡地に造られた世界有数の美しい通りリンクシュトラセ沿いの建物が世界遺産に登録されている。

そのほか、ウィーン市独自で保全地区を設定しており、増改築などはウィーン州建設法によって、厳しくチェックされている。担当部局でヒアリングしている間にも何人もの一般市民が図面を持って来て、オフィスに置いてあるサンプルの屋根瓦の素材や色彩を見ながら相談していた。街を歩いていても、よく観察すると保存地区とそれ以外の地区の区別が分かった。

ウィーンは州であると同時に市でもあるという都市州であり、都市計画関連法は州法だが、そのままウィーン市域に適用される仕組みにある。ウィーン州では、建設法の中に都市計画が定められており、土地利用計画と地区詳細計画がひとつの図面にまとめられている。

オーストリアにおける歴史的景観の保全手法の主なものは、①指定建造物の保全、②地区詳細計画、③保全地区、④都市改善に関する助成制度、の4つである。とくにバロック時代からの歴史的建造物を多く抱える都心部においては、建物の外観は「地域の景観にふさわしいものでなければならない」とする外観規制が貫かれてきた。

ハースハウス問題

パリもロンドンも歴史的環境を保全しながら、現代的な建築様式も容認し、新旧の調和を図ってきた。パリでは、革命100年のエッフェル塔、革命200年のガラスのピラミッドが代表的であるし、ポンピドーセンターもそうだ。そのときは奇抜に見えたそれらの建築物も時間が流れるにつれて、なじんでいき、新たな観光スポットとなる。

ウィーンでも類似の問題が起こった。1980年代後半のハースハウス問題である。これは「アヴァンギャルド建築の旗手」といわれてきたウィーンの代表的な現代建築家ハンス・ホラインが設計したガラスを多用したモダンなビルである。これがウィーンの心臓部シュテファン教会前広場にシュテファン教会と向き合うような場所に建設予定ということで、ウィーンを二分する景観論争に発展した。

住民は周辺の歴史環境に調和しないほか、シュテファン教会への視線を妨げる可能性があるとして反対した。しかし、ハンス・ホラインのデザインには、都心の新たな市民的活性化方策が盛り込まれており、テレビ対談や模型の展示など住民への説得が続くなかで、容認者も増えていった。市議会も意見が二分され、当時、市の幹部だった旧知のエリッヒ・プラムベック氏（2003年大東大政治学専攻政治学特許講義担当）なども、その頃の白熱した論議を思い起こし、説明してくれた。

当初、第1区区議会では、75パーセントが反対だったが、その後、設計の変更も行われ、1987年には「現代的な建築様式でもよい」という変更が外観規制に加えられ、地区詳細計画も変更された。そして、1990年にハースハウスは完成した。今、ハースハウスは待ち合わせの場所にもなり、最上階のカフェは見晴らしがよく、人気スポットとなっている。ほとんどいつも満員である。とくに窓際の席はすぐに塞がる。一階下のレストランも、予約なしには入れないほどだ。都心の歴

史的建築物にはこのような窓の広い開放的なデザインは少なく、確かに新たなにぎわいを創出している。

結果的に外観規制を変更して、現代建築物を受け容れたが、これは建築家、行政、地区住民、専門家、一般市民の協議の結果であり、議会審議の結果であって、対立を引きずるものではなかった。ウィーンのような歴史文化都市でも、現代的要素を容認し、時間とともに吸収し、同化していく奥行の深さを感じさせるケースといえる。この点ではデザインの優れた、都市構造にフィットしたエッフェル塔に通うものがある。

フンデルトヴァッサーの建築革命

もうひとり忘れてならないのは、フンデルトヴァッサーの一連の作品である。彼は本来、画家でときに建築を手がけたが、長く異端のアーティストと見られていた。彼は2000年に72歳で客死しているが、「ウィーンのアントニオ・ガウディ」といわれていた。彼は近代合理主義的建築に異議を唱え、自然との共生に沿った建築空間にこだわった。時代がようやく彼のアイデアに追いつき、今はエコロジカルで楽しい彼の建築はウィーンの観光スポットとさえなっている。

その代表作のひとつが、1985年に完成した市営住宅「フンデルトヴァッサーハウス」である。これはウィーン・ミッテ駅からほど近いところにあるが、実にユニークな建物である。外壁は赤、青、黄、紫、ピンクと多彩な色に塗られ、高さもまちまちのブロックの集合という感じで、上部にはイスラム寺院風ネギ坊主型の塔やダビデ風の彫像もある。さらに屋上はもちろん、途中の階からもよきによきと樹木が伸びている。春は新芽、夏は緑陰、秋は紅葉が楽しめる。まさにダイレクトに生活の中に自然を取り入れている。

このビルの一階には、カフェとギャラリー、ショップがあり、フンデルトヴァッサーの作品のビデオを見せてくれるが、全体は市営住宅なので、外からうかがうのみである。ただ、その向かいにやはり彼の設計した情報センターがあり、関連グッズが展示、販売されている。床面が波打ち、カラフルなトイレも名物で、いつもにぎわっている。

そこから数分歩いたところにクンストハウスウィーンという美術館がある。これも彼の設計で1991年に完成している。ここも床面や階段が波打っている。一階はミュージアムショップと中庭のあるレストランがあり、2階と3階が彼の絵画や建築模型など多数の作品が展示されており、4階はほかのアーティストの企画展が開かれている。スタッフには日本人もいる。

バルセロナで見たガウディの作品に比べて、フンデルトヴァッサーの作品にはより徹底した自然との共生のセンスが感じられる。彼の極端な反合理主義、反近代主義にはもちろん反発もあり、先のプラムベック氏はあまり感心していない風だった。しかし、その独特かつカラフルなデザインは、どこか「おとぎの国」の感覚を呼び寄せる。その新鮮な感動は既存の建築から受ける印象や意味さえも変えていくのである。その実例がシュピッテルアウのゴミ焼却場である。

名所となったゴミ焼却場

地下鉄といっても都心ではないので高架になっているが、その4号線と6号線が交叉するドナウ運河沿いの駅が、9区のシュピッテルアウである。古い建物や街並みの平凡な地区だったが、そこがここ数年来、観光スポットになっているのは、カラフルで屋上庭園のあるテーマパークのお城のようなフンデルトヴァッサー設計のゴミ焼却場が出現したからである。ウィーンでもゴミ焼却場は紛れもなく、迷惑施設のひとつだった。

1990年にまるで遊園地のようなそのゴミ焼却場が完成してから、しばしば地下鉄の窓から眺め、ドナウ運河沿いをジョギングしながら、真ん中が膨らんだカラフルでユーモラスな煙突を眺め入った。昨夏、初めてシュピッテルアウで下車し、近くで観察してみた。オレンジ色のゴミ収集車が頻繁に出入りしていなければ、とてもゴミ焼却場とは思えない。

フンデルトヴァッサーは、ビル、住宅のほかに教会や学校、高速道路のサービスエリア、ドナウ川の遊覧船、温泉リゾート施設もデザインしている。テーマはすべて、自然との共生である。

彼には未完に終わった作品も多い。そのひとつの温泉村の模型を見ると、自然の地形を生かし、緑に包まれた夢の世界のようなデザインである。19世紀末のウィーンには、オットー・ワグナーやアドルフ・ロースなどの設計した超モダンな建築物が続出した。それらは今もウィーンの街にアクセントを与えている。

その100年後の20世紀末に現われたフンデルトヴァッサーの建築は、行き過ぎた近代合理主義へのアンチテーゼとして自然との共生、エコロジカルな都市生活の再構築を主張している。彼の建築世界が主流となっているわけではなく、賛否両論があることは確かだが、建築におけるデザインの力は誰しも否定できないだろう。ゴミ焼却場を見て楽しいものにし、観光名所にするなど、容易になせることではない。同じようなゴミ焼却場が実は大阪にも建設されている。此花区北港白津にあるゴミ焼却場だが、建物の外観のデザインを彼が手がけている。一度、見学に行ってみよう。彼は日本を愛し、名前を日本語訳した「百水」という雅号を持っていたのである。